

氏名(本籍)	カトウ メレキ (トルコ)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第5923号
学位授与年月日	平成23年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ピエール・ロティの日本認識 —眼差しの多様性と明治日本の近代化プロセス—

主査	筑波大学教授	博士(文学)	青柳悦子
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	齋藤一
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	吉原ゆかり
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	平石典子

### 論文の内容の要旨

本論文は、1880年代から1900年代にかけてフランスの作家ピエール・ロティ (Pierre Loti, 1850-1923) が著した日本関連の作品を中心にとりあげて、ロティ特有の複雑な日本認識とその変容のありさまを、明治日本の近代化の過程と照合しながら明らかにするものである。

構成は以下の通り。

#### 序章

第1章 『お菊さん』にみる〈寝ぼけた女性〉としての日本

第2章 服装とアイデンティティ——「江戸の舞踏会」、「観菊御宴」、「皇后の装束」が語るもの——

第3章 「日本の婦人たち」における眼差しのアンビバレンス

第4章 『ロティの結婚』にみるロティのハイブリディティ——〈自己透明化〉と〈民族学者的な眼差し〉——

第5章 ロティがみた中国人と日本人——日中の「魂の親近性」——

第6章 『お梅さん三度目の春』における満州を目指す帝国日本

#### 結章

序章では、まずロティが19世紀後半にフランス軍人として世界各地を訪れた人物であることを注視して、世界情勢の中での日本の位置づけを敏感にテキストに反映した作家として彼をみる本論文の立場を明示する。また先行研究を概観して、日本におけるこれまでのロティ研究の不備や偏りを指摘し、本論文の目的と研究手続きを明らかにする。とりわけ、西洋先進国の人間として東洋など非西洋世界の人々や社会を蔑視した「オリエンタリスト」としてロティを断罪する近年の固定した評価を相対化することの必要性を訴える。

第1章では、ロティの「日本もの」の代表作『お菊さん』(1888年)を分析し、これまで指摘されてこなかったこのテキストの特質やロティの特殊な日本観および彼独特の美学を析出する。特に、このテキストでは日本が奇妙なまでに「笑い」に満ちた「喜劇的」な場と捉えられていること、通常理解とは反対にこの作品には主人公の「恋愛物語」が欠如していて、お菊さんは、日本というロティにとって「人工的」だからこそ

価値がある「演劇的」空間の中の装飾的なオブジェないしは民族学的観察のための媒介項として価値づけられていることを指摘する。総じて「楽園（エデン）」のイメージで彩られるこの時期のロティの日本観が、彼のフランス軍人としての日本における特権的な立場と、彼の日本滞在時（1885年）においていまだ日本が国際的軍事衝突の外部に置かれていたという歴史的背景と密接に関連していることを指摘する。同時に、個人的屈折を抱えていたロティにとって、日本が奇跡的な「蘇生」を可能にしてくれる場とみなされていたことを指摘する。

第2章では、同じく1885年の日本滞재를素材として書かれた紀行論集『秋の日本』（1889年）の中から、ロティが日本の伝統的な装束に対して奇妙なまでの執着と称賛を表明している三編をとりあげて、彼にとっての服装の意義と彼特有の自己認識のありようを明らかにする。まずロティが故国においても変装を好み、みずからを古代に属する人間とみなしながら遠く隔たった古い時代への強い好みを披瀝していたことを指摘し、その上で、東京を中心に日本の貴族的文化伝統に触れる機会をもったロティが、彼の目には身体に「超自然的な」「人工性」を付加するものと映る日本の宮廷装束をその背景となる舞台的空間（デコール）とともに賛美し、そこに「聖性」と呼びうるような価値を見出していたと論じる。

第3章では、雑誌論文として発表された「日本の婦人たち」（1891年）を、ロティによる総合的な日本文化論として位置づける。日本の現実を報告する詳細多岐にわたる記述の中でも、この時期の特徴として、日本人の生活空間の「無装飾性」への称賛を込めた驚きと、それまで「無害な」子どもないしは人形としてみていた日本人を「謎」を含んだ不穏な存在と捉える見方が現れ始めることを指摘し、賛美や憧憬と嫌悪や蔑視がさまざまなレベルで交錯していることを強調する。

第4章では、こうした複雑なロティの異文化への眼差しと特異な自己認識を、タヒチを題材にした『ロティの結婚』（1880年）に遡って検討する。現地女性との恋物語と一般に解釈されているこの作品でも主人公の恋愛は欠如しており、代わって多様な形式での民族学者的な記述に重点が置かれていること、また、現代の西洋社会に違和を感じるロティがみずからのアイデンティティの曖昧さの中で葛藤し続けているさまが窺えることに着目する。作家の分身である主人公がイギリス軍人とされている設定の意味を読み込み、ロティの自己欺瞞や屈折を捉える一方で、タヒチをめぐる英仏の植民地争いがテキストの背景をなしていることを指摘する。

第5章ではまず前章に続けて『ロティの結婚』を扱いながら、このテキストにおいて嫌悪と軽蔑の対象として記されるタヒチの中国人をめぐる叙述に、「黄色人種」に対してロティが抱き始める現実的な脅威と激しい敵対心が鮮明に映し出されていることを、太平洋地域における中国人移民をめぐる歴史的資料を参照しつつ論じる。その上で、清仏戦争（1884-1885年）後の日本滞재를もとに書かれた紀行文「江戸の舞踏会」（1887年）が、緊張した東アジアの政治的・軍事的構図の中に日本を置いた、フランス軍人作家ならではの危機意識を反映したテキストであることを検証する。

第6章では1901年の二度目の来日をもとに書かれた日本をめぐるロティの最後のテキストである『お梅さん三度目の春』（1905年）をとりあげ、ここでは日本が象徴的・文学的に「寒さ」と「死」の空間とされる一方、見過ごされがちな叙述の裏に、極東でめざましい軍事的拡張をし始めた新参の「帝国」日本に対するロティのきわめて現実的な観察眼が働いていることを分析する。このテキストでもロティ特有の批判と賛美を交えた多面的な日本認識が継続される一方で、1902年に日英同盟が成立し執筆時点でフランスと軍事的な敵対関係に立つことになった日本に対する明確な「恐怖」が書き込まれていることを指摘する。

結章においては、肯定か否定かに二分することができないロティの日本に対する多様な見方を総括し、19世紀末から20世紀初頭の20年間におけるロティの日本観の変遷を振り返りながら、理解と誤解を交えた異文化交流の軌跡を記すロティのテキストが変動する時代の証言としてもつ価値を再確認する。

## 審査の結果の要旨

本論文は、日本人に広く知られながらも、これまで学術的な研究対象として綿密に論じられることが意外にも少なかったピエール・ロティの日本をめぐる諸作品を総合的に論じた研究である。

ポストコロニアル研究にとって必須の参考文献である『オリエンタリズム』（1978年）において著者エドワード・サイードによって典型的な「オリエンタリスト」の一人として挙げられたロティの著作は、近年、この方向でのみ読まれてしまう傾向が世界的に強いが、とりわけ日本では、彼の日本関連の著作が日本への好悪のどちらを示しているかという基準を離れて研究されることは難しかった。本論文はこの限界を脱して、いわば初めて冷静に彼の日本関連著作がもつ特性を検証し、日本を対象とするロティの異文化交流のありようを注視したものであり、そこから重要な学術的成果として数々の新たな発見を行っている。

まず、ロティを耽美的・夢想的な作家としてみるのではなく、現実の世界情勢をもっとも敏感に背負う現役軍人の側面を持つ書き手として見据えることで、ロティのテキストが同時代の現実世界と切り結んでいた関係を明らかにしていることが本論文の功績として挙げられる。ロティのテキストにはアジアをめぐる緊迫した軍事対立や国際的な覇権争いの構図が反映され、またたえず変動するフランスと日本との国家間の関係が刻み込まれていることを、本論文は説得力をもって論証している。これはロティ像を一変する重大な発見である。

この視点に立つことによって本論文はロティのテキストから次々と新たな要素を探り出し、めざましい読み直しを行っている。『お菊さん』がすでに確立された文化史的影響や通常理解とは異なって、ロマンティックな異国恋愛物の小説ではなく、むしろ恋愛とは対極的な冷ややかな距離によって成立する異文化観察と違和感（「人工性」「超自然性」）の嘆賞を行う作品であることを検証するなど、数多くの貴重な発見に至っている。テキストからロティ特有の奇妙な言葉遣いの数々を洗い出し、通常価値観とは異なるロティの逆説的な美学を照らし出すことにも成功している。ロティ独特の意味を付与された肯定的な審美的要素として「人工性」「演技性」「舞台性」「変装」「古さ」「原始性」などを抽出した意義も大きい。

また作品と同時代との関係性に着目することによって、本論文が、これまで指摘されたことのない、ロティの日本観の漸進的な変化を素描することに成功している点も重要である。従来の解釈では、ロティの日本理解はどの作品でもほぼ同一であるとされてきたが、著者は、同様のエピソードが用いられ繰り返しに見える場合でも微妙に表現や意味づけが変化していくことや、新たな観点からの記述が現れることを見事に跡づけ、その意味を明らかにしている。ロティのテキスト群が総体として、日本の内的な変化と国際的な勢力地図における日本の位置づけの変化を反映する、優れて時事的な日本研究の素材であることを示したのは大きな成果である。

ロティの複雑な多面性を捉えることに成功したからこそ、この新たな全体像の中で彼の植民地主義的な側面をどう位置づけ直すかというさらに高次の課題が生じることも否めないが、これは本論文の成果に基づいて今後取り組むべき問題と考えるべきであろう。本論文が緻密な読解と丹念な背景分析によって提示し得た斬新で独創的な多数の見解は、優れた学問的功績として高く評価することができる。

平成23年8月29日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。